

ヴィルヘルム・グンデルトの日本研究

——仏教の視座から

兼岡 理恵

はじめに

本プロジェクトのテーマ「文学に織り込まれた仏教のことば」について、「文学」および「仏教」、両者の研究を為したドイツの日本研究者に、ヴィルヘルム・グンデルト (Wilhelm Gundert 1880-1971) がいる。グンデルトは1880年、西南ドイツ・ウュルテンベルク州にて、代々敬虔なキリスト教徒であった家系に生まれた。祖父ヘルマン・グンデルトは宣教師としてインドで布教活動を行い、『車輪の下』で知られる作家ヘルマン・ヘッセは、その孫である(グンデルトとヘルマン・ヘッセは従兄弟同士)。宣教師となったグンデルトは、内村鑑三の自伝的著書『余はいかにしてキリスト教徒となりしか』(How I became a Christian) を読んで感動し、1904年、父ダーフィットが経営するグンデルト書店より同書のドイツ語訳を出版した¹。この翻訳が縁となり、1906年、グンデルトは内村や東京 YMCA 等の助力によって、自由宣教師として来日。新潟県村松市における伝道はじめ、旧制第一高等学校(1906~1909)、第五高等学校(1915~1920)、水戸高等学校(1922~1927)等で教鞭をとりながら、日本文化の研究を行った。この間1920年にはドイツに帰国し、1921年ハンブルク大学で同大・日本学教授のカール・フローレンツ (Karl Adolf Florenz 1865-1939) に師事し²、1925年「日本の能楽における神道 (Der Schintoismus im Japanischen No-Dorama)」で博士号(哲学)を取得した。1936年にはフローレンツの後任としてハンブルク大学日本学講座の正教授に就任、同大・総長、副総長を務めた。その一方1932年にナチ党に入党し、同党のプロパガンダ的な講演・評論執筆などを行い、戦後はナチスへの協力により公職を離れるが、1946年にハンブルク大学退職主任教授扱いとなった。その後、日本・東洋思想の研究に従事し、晩年には、中国宋代の禅宗の宝典ともされる『碧巖録』のドイツ語訳(1巻1960年、2巻1967年、3巻1972年〈グンデルトの没後刊行〉)を為し、それらの業績によって勲二等瑞宝章(1969年)、学士院名誉会員(外国人枠)に推挙され(1970年)、1971年、91歳にて没した。

日本におけるグンデルト研究については、渡辺好明による詳細な伝記研究があるが³、研究の論点は、グンデルトの活動時期・研究テーマにより次の三つに大別される。

- I、1920年代：能楽研究について(新田1967、片岡1978、関根1979など)
- II、1930~1940年代：グンデルトとナチス・ドイツとの関係、その活動について(ヴォルム1984、辻2009、清水2015、シャイト2003・2020など)
- III、1950年代~晩年：『碧巖録』翻訳をはじめとする禅研究について(平田1966など)

近年のグンデルト研究はII、すなわちナチス・ドイツ時代、ナチ党員としてのグンデルトの活動をナショナリズムあるいはファシズムの観点から論じるものが主流である。その背景には、戦前~戦中におけるドイツの日本学者たちが、国粹主義的なナチのプロパガン

ダ的要素から神道研究を行ったものの、戦後になってそれがタブー視されるようになった結果、禅仏教研究に向かった—いわば戦前・戦中の神道研究の「隠れ蓑」としての禅仏教研究への「転向」という、ドイツの日本学研究史がある⁴。確かにグンデルトがナチ党员として、戦時下に同党を高揚する講演・活動を行ったことは事実である。しかし本稿で後述するように、グンデルトは戦前の1920年代、すなわち彼の日本研究初発時より、仏教研究に興味・関心を抱いていた。またグンデルトには能楽に関する諸論はじめ、上代から1900年代初頭までの文学史を記述した“*Die Japanische Literatur*”（『日本文学史』1929年）⁵、『徒然草』の概説および抄訳（1929年）⁶、東洋詩のアンソロジーである編著“*Lyrik des Ostens*”（『東洋の叙情詩』1952年）などの文学研究⁷、さらに古代から明治期以降までの日本の宗教史を概観した“*Japanische Religionsgeschichte*”（『日本宗教史』1935年）などの仏教研究があるが、これらの日本文学・宗教研究について十分な考察が為されているとは言いがたい。グンデルトのナチ時代の営為を追究するためにも、まずは彼の研究それ自体に対する検討が必要だろう。

そのような観点から稿者は以前、グンデルトの博士論文「日本の能楽における神道」を中心に、その能楽論・文学研究などについて考察したが⁸、本稿ではプロジェクトテーマをふまえ、グンデルトの講演・談話などにおける仏教研究に関する言説を確認し、グンデルトの日本研究を辿る足がかりとしたい。

1、1920年代における欧州の仏教研究について—「欧州最近の宗教思想」

まず最初に取り上げるのは、1926年、高野山大学・密教研究会による学術誌『密教研究』に掲載されたグンデルトの講演に基づく速記録、「欧州最近の宗教思想」である⁹。グンデルトは1925年1月に博士論文「日本の能楽における神道」を完成させ、同6月頃には宣教師・牧師の職を辞し、夏に約1ヶ月、高野山の宿坊に滞在して仏教を学んでいた¹⁰。本講演はその際のもので、速記録の前書きに掲げられた編集部説明には、「本稿はかねて前号編集雑記に報ぜし所のドクトル、ウィルヘルム、グンデルト氏が八月十八日われ等学徒のために講演されたるものを、本学文章部員諸氏の速記になれるものにして本稿により欧州最近の宗教思想が窺知せらるゝものなり」とある。また講演録の冒頭、グンデルトの言葉にも「私は凡んど一ヶ月の間こちらに居ておやつかいになり、いさゝか密教の研究を志して…」とあり、この講演は、博士論文完成後のグンデルトが、まさに研究に専心せんとした頃のものといえる¹¹。

まず講演のテーマについて、グンデルトは以下のように述べている。

最近と云ふ言葉は近代日本に一種特別な引力のある言葉のやうに見える。何でも一番新しい事さへ調べれば大丈夫だと思ふ人が多いやうである。然し最近を見ただけで物の実相は決して解りません。現在は果であり、因は過去である。現在を語るには過去を語らねばならぬ。（中略）過去には現在も表はれてゐる。夫に依つて現在が明かになる。我々の宗教及び文明の過去の成行を話したい。（傍線部は稿者に拠る。以下、同）

「現在は果であり、因は過去」という「因果」の思想に基づき、講演テーマである「最近」の「欧州の宗教思想」を説くには「過去」から説く必要があるとし、自然崇拝以来の宗教史を概説してゆく。また扱う地域は、欧州全般では範囲が広いため「四方八方、隣国に接

して」おり、「島国とちがひ思想上の関係は多面的で欧州全体を代表すると云つても差支えない」ドイツを中心に進めるとする。その中で仏教については、

仏教が欧州に知られてから百年位である。初めは知識も浅薄だったが次第に深くなって今日は盛んに研究が行き渡ってゐる。併し西洋一般には盛んでないのである。唯ある一部の人が非常にその仏教に帰依し、接近してゐる。

と欧州の仏教研究について概観する。そして日本の仏教について「一番真面目に一番深く研究した学者」として、ロシアの日本学者ローゼンベルグ (Otto Rosenberg 1888-1919) を挙げ、以下のように評価している。

仏教の研究は経典から始むべきものでなくその経典の解釈を現代までに伝える処の諸論（即ち阿毗達磨と其註解書）から始むべきものであると云ふ事、その註解書は日本に於て一番よく保存されてゐるといふ事、大乘教は決して原始仏教の主義から脱線したのではなく、その根本思想は小乗と同一のものであるといふ事を深い学識を以て力説した…

さらに欧州における仏教について、一番必要なことは「学識的に研究する事」であり、「宗教的伝播はまだ考へもの」、すなわち時期尚早とし、その理由について次のように述べている。

西洋は破産の状態であるが、それが滅亡ではないから、之迄統一した分子が分離したのみである。キリスト教は無力に見られるとは云へ、その為にキリスト教の精神がなくなつたのではない。ギリシャの理想哲学も同様である。急に大きな各国民に全く別な離れたものをおしつける事は出来ない。仏教は冷静な研究によって発達しなければならない。

「キリスト教は無力に見られるとは云へ、その為にキリスト教の精神がなくなつたのではない」という主張には、敬虔なキリスト教徒として育ち、宣教師として伝道を第一の目的として来日したグンデルトが、西洋とは異なる東洋の一国・日本において実感したであろう宗教・思想の相違、さらにそこから彼が、日本の神道や仏教研究に向かった背景などが窺える。

2、1930年代における日本学・仏教研究について―「独逸に於ける日本学の意義」

先述した講演から10年を経た1935年、グンデルトはフローレンツの後継として、ハンブルク大学日本学科・正教授の就任が決まり、ドイツに帰国することとなった。次に取り上げるのは、当時グンデルトが主事を務めていた日独文化協会が主催したドイツ帰国3日前の1935年11月16日、東京帝国大学にて行われた講演の記録である¹²。「独逸に於ける日本学の意義」と題された本講演において、グンデルトは、日本研究には幅広い分野・地域の学問が必要であり、日本固有の神道についても特に近隣諸国の宗教を参考にせねばならないと指摘する。

日本固有の神道を究めるに於いても唯日本を観ただけでは分りませぬ。色々他の国民のさういふ信仰に類した宗教を調べなければなりませぬ。殊に支那人、琉球人、朝鮮人、蒙古人等の宗教をも参考としなければなりませぬ。

そして仏教については、インドから伝播されたものであるゆえ、その伝播ルート、各国との関係なども顧みねばならないと主張する。

日本の仏教を調べて見ると非常に広い又遠い処まで関係が開かれてきます。支那のみならず印度の宗教、又その文化をも考に入れなければなりません。又印度から日本にまで伝はるその国と国との間との関係連絡をも顧みなければ、日本の仏教は容易に分りませぬから、そこに非常に大きな広い研究は始まってくるのであります。けれども「独逸の支那学者」の中には、「支那文化の一部門としか日本仏教をみない学者もいる」として彼らの姿勢を批判した上で、日本仏教の研究価値が認められるよう尽力せねばならないと主張する。

日本の仏教は極く枝葉のもので、仏教の根本は矢張印度にあつて、それが支那、西藏に抛ったもので況んや日本の仏教は印度の仏教がずいぶん遠い処まで伝播し、その途中で大に墮落した実例としか認めて居ない傾向もないではありません。ですから其処に日本の仏教が本当に深い研究に値する大きな対象と認められるにはまだ一骨を折らなければならないのであります。

しかし近年、段々と日本の仏教研究の重要性が高まってくるという「大変に喜ぶべき現象」が生じてきたとする。それは、日本仏教が他国のものに比し「組織」化されていること、また「伝統」的なものが詳細に継承されているため、日本仏教を研究することが仏教そのものの研究を深めるものだと理解されてきたためとする。

段々日本の仏教は決して仏教の枝葉ばかりでない、却って学術的に仏教を究めるには日本の仏教のごとき能く組織が立って、さうして非常に詳しい伝統が今日までの残って居るやうなものは他になく、仏教を究めるには却って日本の仏教を中心とするに限るといふことが段々判ってくることは大変に喜ぶべき現象であります。

そして日本学の今後の課題を、次のように説く。

自分の存在の為に大いに闘はなければならない。して見ればこの日本学の独特の素材は何処に在るかといふ問題が益々重大なこととなって来るのであります。

ドイツでナチズムが台頭してきた時期に行われた本講演において、ナチ運動を「政治的方面に限られた運動」ではなく「独逸国民の心の深い所から何か新しいものが確に湧出した」精神的運動と捉え、ドイツの学問研究は「国家」の実際的な要求にそくした「国民」のための学問研究に昇華されるべきなどと主張するグンデルトの姿勢に対し、ナショナリズム的色彩が濃厚だとする批判もある¹³。しかし少なくとも日本の仏教に関しては、組織的かつ伝統が継承されている点を高く評価し、日本の仏教を研究することが仏教全体の研究に繋がるなどその意義を明確に説いている点は、注目に値しよう。

3、1960年代：「信仰」と「研究」―「『碧巖録』独訳余話」

最後に掲げるのは、講座禅8『現代と禅』（筑摩書房 1968）に収載された「『碧巖録』独訳余話」である（日本語訳：上田閑照）。ここでは晩年の業績である『碧巖録』ドイツ語訳を中心に、グンデルトが自らの研究や禅仏教などについて語ったものである。この中でグンデルトは『碧巖録』翻訳作業について、次のように述べている。

『碧巖録』の内的理解へと私を導いてくれたものは結局のところ、実は仏教的なものではなく、私自身の由来に含まれている精神的遺産即ちキリスト教から来たものであった。（中略）しかし年月の経過、何十年の人生のうちで私のキリスト教的確信は様々に変わった。確信が崩れ去ったように思われた時期も多かった。多くの点で伝統的

なドグマから離れざるを得なかったが、それは、以前の立場からすると、殆ど信仰からの脱落のようにも見えた（中略）。しかしながらこのような回り道は、結局のところ私を聖書の語る神の不可測なる秘義を新しい光のもとに見得るようなところに導いてくれた。そして実は、この光が私にまた仏教、殊に禅の不可測なる秘義に対する眼を拓いてくれたのである。禅とキリスト教の間には、いくつかの点においてリアルな一致がある。『碧巖録』翻訳を私が或る程度までなし得たのは、全くその一致のおかげである。

こうしたグンデルトのキリスト教、および禅仏教に対する姿勢について、仏教学者・平田高士（1924-1980）が、1961年から約2年間ドイツ・ハイデルベルク大学に留学した際、終始世話になったというグンデルトが度々語っていたこととして、「ドイツの思想家、文化人と呼ばれる人々の中に、東洋思想の探究を介して西欧の伝統的な文化思想の持つ困難を打開しようと試みる一群の人々がある」という発言が思いあわされる¹⁴。また同じく平田によれば、グンデルトはある日、次のようなことを語ったという¹⁵。

禅に言う無住に住するという言葉は素晴らしい言葉です。従来のキリスト教神学は何か一定のところに住着していたのではないかと、キリスト教といえども個人の信仰体験から教義や神学が生まれるのですから、やはり無住に住するものでなければならぬはずです。

「無住の住」とは『金剛経』における「応無所住而生其心（応に住する所無こうしてその心を生じず）」、何物にもとらわれず、執着を捨てた自由の境界にあることを言う。また「キリスト教といえども個人の信仰体験から教義や神学が生まれる」という言には、グンデルトが属していた「シュヴァーベン敬虔派」が、個人の神秘的敬虔を重視するという特徴を有していたという点と結びつく。さらにグンデルトは、「私は禅の本を翻訳しその心理を探ろうとはしていますが、決して禅の信者になろうなどとは思っていません。私はあくまでキリスト教徒です」と述べたという。ここにはキリスト教の一信徒としてのグンデルトが、その信仰を深めるべく仏教、禅研究に向かい、さらには宗教そのものの本質を捉えようとした、彼の営みが見えてくる。

このようにグンデルトの仏教研究は、キリスト教徒としての在り方、さらにキリスト教、仏教などの宗派をこえて、宗教自体の本質を捉えようとした営為として追究する必要があり、戦後のドイツ日本学者たちによる神道から禅仏教への「転向」とは、一線を画して考えるべきものだろう。

おわりに

以上本稿では、グンデルトの講演を中心に、彼の仏教研究に関する言説を確認してきたが、グンデルトの著書・論考自体には触れ得なかった。たとえば、グンデルトの代表的著作“*Japanische Religionsgeschichte*”（『日本宗教史』1935年）は、戦前～戦中の日本における皇国史観的な記述のため、戦後強い批判を受けた書であるが、その一方、同書における日蓮に関する記述は、わずか3頁に過ぎないものの「日蓮のエッセンスを、われわれに平易に解説」しており、「グンデルトによって扱われている“日蓮の教え”は極めて魅力的」という指摘もある¹⁶。また同じくグンデルトの主要著書“*Die Japanische Literatur*”（『日本文学史』1929年）における仏教文学や謡曲に関する記述なども、検討する必要があるだろう。

これらのグンデルトによる論考が、一般の日本文学・仏教研究に新たな視座をもたらす可能性もある。今後の課題としたい。

※本稿は、科学研究助成金・基盤研究（C）「近代の日本／海外における風土記研究・享受に関する多角的研究」（課題番号 19K00317 研究代表者・兼岡理恵）、科学研究助成金・基盤研究（C）「明治・大正期の日独思想・文化交流の多角的研究：北欧作家ラーゲルレーヴを媒介に」（課題番号 19K00532 研究代表者・中丸禎子）の研究成果の一部である。

【主要参考文献】

- ・片岡美智「〈能〉への二つのアプローチ—N.ペリーと W.グンデルトの対照的な「三輪」」（『京都外国語大学研究論叢』（18）、1978・3）
- ・佐藤マサ子『カール・フローレンツの日本研究』（春秋社 1995）
- ・清水雅大「ナチズムと日本文化— W・ドーナートにおける日独文化提携の論理—」（『現代史研究』61 2015・12）
- ・関根 俊雄「グンデルトの能楽本質論」（『跡見学園短期大学紀要』15、1979・3）
- ・辻朋季「カール・フローレンツの日本研究とその系譜—異文化賞賛に潜む支配の構図」（『ドイツ研究』43、2009・3）
- ・中丸禎子「無教会の北欧受容 香川鉄蔵、イシガオサムのラーゲルレーヴ受容を中心に」（『北ヨーロッパ研究』第17巻、2021・7）
- ・新田義之「ヴィルヘルム・グンデルトの謡曲研究」（『外国文学研究紀要』15(2)、1967・2）
- ・新田義之「グンデルト一家とその周辺」（『外国語科研究紀要』37(1)、1990・3）
- ・平田高士「碧巖録三十五則に於けるグンデルト教授の疑義に就いて」（『印度学仏教学研究』14(2)、1966・3）
- ・平田高士「世界の中の禅 ドイツ」（『講座 禅』第8巻、筑摩書房 1974）
- ・平藤喜久子「海外における日本神話研究—ファシズム期の視点から—」（國學院大學研究開発推進センター編『昭和前期の神道と社会』弘文堂 2016）
- ・フラッヘ・ウルズラ（訳：杉原 早紀）「ドイツ語圏の日本研究から見た神仏分離」（『国立歴史民俗博物館研究報告』148、2008・12）
- ・フラッヘ・ウルズラ（訳：江口 大輔）「ドイツ語圏の日本学における神社に関する研究」（『国立歴史民俗博物館研究報告』148、2008・12）
- ・ヘルベルト・ヴォルム「ナチス時代の日本学研究」（『ベルリン日独センター報告集』1、1989・8）
- ・ベルンハルト・シャイト「二十世紀のドイツ語圏における神道研究」（『神道・日本文化研究国際シンポジウム（第一回）各国における神道研究の現状と課題』國學院大學 21世紀 COE プログラム、2003・9）
- ・ベルンハルト・シャイト「ナチス時代の日本学における「神道」と「禅」：W.グンデルトとその周辺」（平藤喜久子編『ファシズムと聖なるもの／古代的なるもの』北海道大学出版会 2020）
- ・渡辺好明『ヴィルヘルム・グンデルト伝』（私家版 2017）

- ¹ 内村鑑三の『余はいかにしてキリスト教徒となりしか』は、当初アメリカ人読者を想定して英語で書かれ、東京およびアメリカの出版社から 1895 年に出版されたが、その後絶版になっていた。しかしグンデルトによるドイツ語訳は好評を博し 1906 年には重版され、さらにスウェーデン語訳・フィンランド語訳（1905 年）、デンマーク語訳（1906 年）、フランス語訳（1913 年）等ヨーロッパ諸国で翻訳され、内村の名を欧州に広める契機となった。
- ² カール・フローレンツは、ドイツの日本学者。1888 年に来日し、1889 年から 1914 年の 25 年間、帝国大学文科大学（1897 年より東京帝国大学）にてドイツ語とドイツ文学、さらに博言学の講座を担当した。その一方、日本文化・文学の研究に従事し、1899 年、『日本書紀』の神代紀に関する翻訳・注釈的研究により、外国人として初めて東京帝国大学の文学博士号を取得、ドイツ帰国後、ハンブルク植民学院（現在のハンブルク大学）において初代・日本学教授となった。フローレンツの日本研究および風土記研究については、拙稿「十九世紀末における風土記享受：カール・フローレンツを中心に」（『国語と国文学』96(11)、2019・11）、同「『山城国風土記』逸文・伊奈利社条のドイツ語訳：カール・フローレンツ『日本の神話』」（『朱』63、2020・3）にて論じた。
- ³ 渡辺好明『ヴィクヘルム・グンデルト伝』（私家版 2017）
- ⁴ ベルンハルト・シャイト「二十世紀のドイツ語圏における神道研究」（『神道・日本文化研究国際シンポジウム（第一回）各国における神道研究の現状と課題』國學院大學 21 世紀 COE プログラム、2003・9）、平藤喜久子「海外における日本神話研究—ファシズム期の視点から—」（國學院大學研究開発推進センター編『昭和前期の神道と社会』弘文堂 2016）など。
- ⁵ 福田秀一は同書を、ドイツの日本文学研究上、カール・フローレンツ『日本文学史』（1906 年）に続くものだが、「（フローレンツ『日本文学史』より）もう一步進んで、戦前の欧文日本文学史の最高峰と言うべき」業績と、高く評価している（「欧米における日本中世文学の研究と紹介」『国文学研究資料館紀要』11、1985・3）。
- ⁶ W.Gundert: *Aphorismen aus den Tsusrezuregusa des Yoshida Kenko*, 大和 *Yamato* 1, 1929. 同論の中でグンデルトは、日本人を理解するには『徒然草』がもっともふさわしい書であると述べており、それについて島内裕子は「徒然草をここまで高く評価した人物は、初めて」とする。さらにグンデルトが兼好を、「宮廷人の優雅さと仏教の峻厳さが融合した人物として捉える」点も、「今までにない視点」と指摘している（「徒然草研究の根源—欧米における研究から問い直す」『中世文学』52、2007・6）。
- ⁷ “*Lyrik des Ostens*”（『東洋の叙情詩』）は、近東・インド・中国・日本の四部構成から成り、グンデルトは日本および中国の部の大部分を担当している。また日本の部は、上代の記紀歌謡から明治期の正岡子規の俳句までが記載され、そのうちグンデルトは主に上代～中世の作品を解説し、その中には、仏教の無常観が示されているともいわれる「いろは歌」も掲載されている。
- ⁸ 拙稿「W.グンデルトの日本学 —キリスト教から神道、そして文学—」（『比較日本学教育研究部門研究年報』18、2022・3）。本稿は同論をふまえ、新たな視点を加えて執筆したものであり、一部重複する箇所がある。
- ⁹ ヴィルヘルム・グンデルト「欧州最近の宗教思想」（『密教研究』23 1926・12）。引用にあたっては旧字を新字に改めた。
- ¹⁰ 渡辺、同注 3、199 頁。
- ¹¹ 本稿の末尾に、グンデルトの事績、および彼の師カール・フローレンツを中心とした外国人日本学者の事績を記した「W.グンデルト関連年表」を掲げた。適宜参照されたい。
- ¹² ヴィルヘルム・グンデルト「独逸に於ける日本学の意義」（『日独文化講演集』第 10 輯、1936・7）
- ¹³ 清水雅大「ナチズムと日本文化— W・ドーナートにおける日独文化提携の論理—」（『現

代史研究』61 2015・12)

¹⁴ 平田高士「世界の中の禅 ドイツ」（『講座 禅』第8巻、筑摩書房 1974）

¹⁵ 同注 14

¹⁶ 湯田豊「日蓮の教え」（『法華文化研究』33、2007・3）

（千葉大学大学院人文科学研究院 教授）

W.グンデルト(1880-1971)関連年表

元号	西暦	W.グンデルト関連	関連事項	
明治	13	1880	ドイツ・シュツットガルト市郊外レンツハルテに生まれる	チェンバレン『日本古歌集』“ <i>The Classical Poetry of the Japanese</i> ”
	15	1882		チェンバレン『英訳古事記』“ <i>Records of Ancient Matters</i> ”
	20	1887		2月、アストン「日本上古史」(アジア協会)口頭発表
	21	1888		フローレンツ、来日。チェンバレン“ <i>A Handbook of Colloquial Japanese</i> ”
	22	1889		4月、フローレンツ、帝国大学文科大学講師。ドイツ語・ドイツ文学担当
	23	1890		9月、チェンバレン、帝国大学博言学教師を辞任。(同年“ <i>Things Japanese</i> ”刊)
				三上参次・高津鯉三郎『日本文学史』
				フローレンツ、10月から博言学も担当。この頃、松江でラフカディオ・ハーンと会う。秋頃から藤代禎輔(帝大・独文、フローレンツに師事)、文科大学での木村正辞の万葉集授業出席、フローレンツの依頼により『万葉集』ドイツ語訳を進める
	29	1896	ヴェルテンベルク王国立初等新教神学校に入学	アストン『英訳日本紀』“ <i>Nihongi:Chronicles of Japan from the Earliest Times to A.D. 697</i> ”
	31	1898	ヴェルテンベルク王国立高等神学校入学	
	32	1899		6月、フローレンツ、神代紀の翻訳・注釈的研究により東京帝国大学にて文学博士号取得(帝大における初の外国人博士号)
				芳賀矢一『国文学史十講』
				アストン『日本文学史』“ <i>A History of Japanese Literature</i> ”
	33	1900	ハレ大学に学ぶ	
	34	1901	チュービンゲン地方大学神学科に学ぶ	フローレンツ『日本の神話』
	35	1902	8月神学就職試験合格。牧師候補の資格を得る。9月ヴェルテンベルク新教地方教会の副牧師に任命される	
	37	1904	1年内村鑑三『余はいかにしてキリスト信徒になりしか』翻訳・刊行(グンデルト書店より)。7月神学就職試験合格、ヴェルテンベルク新教地方教会の正牧師の資格を得る	
	38	1905	ベーテルの神学伝道候補生養成塾にて、派遣伝道の予備および病者看護法の訓練を受ける	アストン『神道』“ <i>Shinto:the Way of the Gods</i> ”
	39	1906	4月、伝道の目的で来日(～1909)。11月、第一高等学校のドイツ語臨時講師となる。	フローレンツ『日本文学史』(1903より随時刊行された5分冊を合冊・出版)
	40	1907	1月、内村鑑三『代表的日本人』のドイツ語訳刊行(グンデルト書店より)	
	42	1909	3月、第一高等学校退職。伝道地を求めて、千葉・鳴浜、岩手・花巻、長野・上諏訪、新潟・大鹿、静岡を訪ねる	
	43	1910	6月、新潟・村松町に移住。伝道を始める	
	44	1911	3月、柏木の内村鑑三を訪ねる。9月、宍戸元平が村松町に移住、グンデルトの伝道活動に助力する	
大正	元	1912	4～10月、ドイツに一時帰国	
	2	1913	3月、宍戸元平編『ナザレのイエス』刊行(村松聖書舎)。5月、内村鑑三、村松町のグンデルトを訪ね、同地にて講演(3回)	
	3	1914	8月、内村鑑三を訪問。「戦争と私と」(『聖書之研究』9月号)発表	フローレンツ、7月ドイツへ帰国。ハンブルク植民学院・日本学講座教授着任。10月、同大にて講演「ドイツと日本」(→翌年『帝国文学』第20巻6号「消息」にて、同講演紹介)
				第一次世界大戦勃発

4	1915	6月、村松夏季学校開催。9月、第五熊本第五高等学校にドイツ語講師として赴任(～1920)	
8	1919	7月、内村鑑三を訪問	6月、ヴェルサイユ講和条約。終戦
9	1920	2月、ヘレネー夫人、子供たちとともにグンデルトに先立ち帰国。『私が見た日本国民性の変移』(独立書房)出版。7月、熊本を退去。同月、日本を出立。	
10	1921	10月よりハンブルク大学にてカール・フローレンツに師事し、日本学を研究	
11	1922	4月より旧制水戸高等学校の講師に着任(～1927年3月まで)。同月、内村鑑三を訪問。11月、プロテスタント伝道協会に宣教師兼牧師職の解任を願うも、許可されず。後任が決まる1925年6月まで続ける	フローレンツ、4月、東京帝国大学より名誉教師の称号、授与される
12	1923	9月、関東大震災に遭遇するが被害なし	9月、関東大震災
13	1924	水戸市郊外へ転居	
14	1925	1月、「日本の能楽における神道」完成。同論文によってハンブルク大学にて哲学博士号を取得。同年『ドイツ東洋文化研究協会報告10』に発表。夏、高野山の宿坊に滞在。8月、高野山にて「欧州最近の宗教思想」講演(『密教研究』23 1926掲載)	フローレンツ、A・ベルトホルツ、E・レーマン編『宗教史教科書』の「日本人」項目執筆、『古今和歌集辞典』刊
昭和元	1926	3月、日本政府が提供した洋館へ転居。4月、学士会館にて「日本の能楽に就て」講演	
2	1927	3月、日独文化協会主事に就任。6・7月「日本の能楽に関する新研究」(『明治聖徳記念学会紀要』)。秋、東京・大森に転居	
4	1929	『日本文学』刊行(ポツダム)。賀川豊彦『死線を越えて』翻訳・刊行(グンデルト書店より)	9月、アメリカの株価大暴落に端を発し、世界大恐慌へ
5	1930	春より三ヶ月ドイツ帰国。3月28日内村鑑三没(69歳)	
9	1934		8月、アドルフ・ヒトラー、総帥兼首相。国家元首に
10	1935	『日本宗教史』刊行(グンデルト書店)。11月、帝大にて「独逸に於ける日本学の意義」講演(『日独文化講演集』第10輯 1936掲載)。11月、帰国	フローレンツ、1月、OAGより『K・フローレンツ教授70歳の誕生日のためのドイツ東洋学協会記念論集』刊行。11月、久松潜一の訪問を受ける ヘルマン・ボーネル『神皇正統記』独訳(グンデルトの勧めによる)
11	1936	ハンブルク大学日本学科主任教授に着任。日本政府より勲四等旭日章を授与される	11月、日独防共協定調印
			フローレンツ、6月、ライプツィヒ大学より博士号取得50年を記念する新学位記を授与される。ハンブルク大学、退官
12	1937	4月、ハンブルク大学哲学部長に就任	11月、日独伊三国防共協定調印
13	1938	秋、ハンブルク大学総長に就任	1月、フローレンツ「満仲—あるいは仲満」(『モニュメンタ・ニッポニカ』創刊号)。ピアソン『英訳万葉集』第5巻』刊行(オランダ・ブリル出版社、フローレンツ、共編者とされる)
14	1939	フローレンツの追悼文執筆(Nippon zeitschrift für Japanologie 5-2、同文は「カール・フローレンツ博士を憶ふ」として『文化日本』3-8(8月刊)に翻訳掲載される	フローレンツ、2月9日没
16	1941	ハンブルク大副総長に就任	12月、日本、真珠湾攻撃(太平洋戦争勃発)
17	1942	秋、ベルリンの東洋学者会議にて「日本における天皇制の発展と意義」を講演。11月『日本と日本人』刊行	
	1943	1月、オーストリア・ポーランド等で講演。7月、ハンブルク大空襲で住居・蔵書消失。8月、フレイングの農家宅に疎開。10月よりグロース・プロトベックの枢密顧問官ヘルリヒ別荘に滞在。年末より大学で語学の授業再開	7月25日、ハンブルク大空襲
	1944	5月、『東洋学専攻』創刊	
	1945	ゲッペルスの演説(ドイツ帝国について)添削。5月、ドイツ国防軍無条件降伏。ナチスドイツの敗戦により8月12日付で公職追放となる	

	1946	公職追放を説かれ、ハンブルク大学退職主任教授。4月、米軍占領地ショルンドルフに転居。9月、裁判所審理でナチスへの「消極的な同調者」として、罰金600マルク	
27	1952	秋、南原繁の訪問を受ける。共著『東洋の叙情詩』刊行(カール・ハンザー書店)	
29	1954	7月、マールブルクにて鈴木大拙と会い、同大における鈴木氏の講演・通訳をつとめる。5月、南ドイツラジオ局にて「仏教」放送(のち『仏教』(クリーナー・ポケット版)として格好)。10月、ノイ・ウルムに転居	
30	1955	2月、ハンブルク大学より大学教授定年退官の通知	
33	1958	5月、フライブルク大学にてゼミナール開催(司会・ハイデガー、グンデルト、久松真一ら参加)	
34	1959	10月、上田閑照(当時、マールブルク大・学生)の訪問を受ける。11月、ユネスコ助成金にて『碧巖録』英訳を行うための会議に出席	
35	1960	『碧巖録 禅仏教のバイブル』第1巻刊行(カール・ハンザー書店)。9月、国際宗教学会大会にて「禅仏教における問い」をテーマに発表	
36	1961	7月、ノイ・ウルム・ドイツ平和同盟を設立、事務局長に就任	
37	1962	9月、東洋大学から名誉学位授与される。同年、平田精耕がグンデルト家に滞在、『碧巖録』翻訳に助力	
42	1967	『碧巖録 禅仏教のバイブル』第2巻刊行(カール・ハンザー書店)	
43	1968	12月、『碧巖録』独訳余話(『講座 禅』第8巻)発表	
44	1969	2月、日本政府より勲二等瑞宝章授与	10月、フローレンツ『日本文学史』再刊(K・F・コーラー出版社)
45	1970	日本学士院名誉会員(外国人枠)に推挙される	
46	1971	8月3日、没	
48	1973	11月、『碧巖録 禅仏教のバイブル』第3巻、デボン教授の補足・編集により刊行	

*「W・グンデルト関連」には、W・グンデルトに関する事項を掲げた。

*「関連事項」には、グンデルトの師であるドイツ日本研究者カール・フローレンツ(1865-1939)に関する事項、当時の主たる日本研究、また日本/世界情勢について掲げた。

*本年表の作成において、主に以下の文献を参考にした。

渡辺好明『ヴィルヘルム・グンデルト伝』(私家版 2017)、佐藤マサ子『カール・フローレンツの日本研究』(春秋社 1995)、